

買い、毎日のこぎりでくどにに入る長さに切ったものだ。そのころ私は小学校四年生だつたが、今考えてみるとよくがんばつたものだと思う。

（春日井市大手田酉町在住）

私の戦争体験

神 谷 忍

私の体験は、話すべきことがあまりに少なすぎる。世間一般に語り伝えられている戦争の悲さんさを体験しえずに過ぎてきただ。

すなわち一九四一年（昭和十六年）十二月から一九四五年（昭和二十年）

八月そしてその後数年の戦後の生活において、どんな体験があつただろうか。小学生・中学生時代の思い出は断片的にしかつづれない。また、現代の子どもたちからすれば、遠い別世界の出来事を話してもらつていると受け取るのではないか。人によく言われるが、疎開^{そかい}の経験があるからその話をしたらと言われる。確かに私たちの世代のほとんどの人が疎開を経験している。縁故か集団かどちらかの疎開である。

私は、親のけんめいの努力のせいと思うが、祖父が死亡し在所もないのに祖父の地という田舎



に行くことができた。

後の話にててくる集団疎開の悲さんさについて経験しないですんだ。語るとするならば、その縁故疎開地での出来事を、断片的に思い出したことを話すくらいしかない。

一九四四年（昭和十九年）、五年生で田舎へ行つた。学校から三キロメートルほど離れた荒地を畑にしてさつまいもを植えたこと、月に一回、四キロメートルほど山奥へ炭を取りに行き、それを駅まで運んだことが思い出される。

また、春・秋の養蚕（絹糸をとるために カイコをかうこと）の時に、くわの小枝を集め、その枝の皮をさいて乾燥させ、学校へ持つていったことなども強く心に残っている。

しかし、このような体験では、子供たちに何を語りつげるか、残念ながらないに等しい気がする。断片的に思い出す事柄をぽつりぽつりと話すことで今の子供たちが何かを感じてくれるといいと思う毎日である。

（名古屋市名東区在住）